実は 1981 年に説明されていた「本能寺の変」
実は誰もそれを理解できなかった「本能寺の変」

「本能寺の変」について歴史研究者は「分からない」と言います。そういいながらいろいろな説が出ていますが、どうせわからないのだからという前提のもとに発言しているとも思えます。
しかし「本能時の変」に至る経緯についてはよく分かっているかといえば、そうではありません。
　歴史研究者の教科書『日本歴史大系』には「本能寺の変」は次のように説明されています。しかし驚くべきことに研究者達はその内容を理解できませんでした。彼らが理解を欠いた理由は、一般に苦手な社会科学的な説明であり（但しトップは除く）、また専門分野が分かれる中世史と近世史の知識が要求されたからです。

（1）信長の家臣団統制の脆（あやう）さを暴露し、織田政権は、未完のまま瓦解した。

（2）濃尾から近江にかけて領国支配を拡大した信長も、伝統的に寺社・本所（荘園領主）勢力が強い畿内の支配は十分でなかった。

（3）室町幕府の奉公衆・奉行人でもあった土豪層は、明智光秀らの旧幕臣と結びついていた。

（4）織田政権がこのような在地構造（最新地域であり、かつ大寺院など伝統勢力の強い地盤）をもつ畿内を自己の権力基盤にすることができなかったことに、織田政権が自滅せざるを得ない要因がひそんでいたと思われる。

※上記該当箇所は三鬼清一郎名古屋大学名誉教授が執筆。論文は 1981 年「織田政権の権力構造」

織田政権の自滅⇒権力構造の矛盾

歴史認識の過誤⇒室町幕府滅亡期

「１５７３年(天正元)年には将軍権力の回復をめざして信長に敵対した義昭を京都から追放して室町幕府を滅ぼし」とする高校教科書の記述は誰一人論証していない事実。

（１）は織田政権の自滅の要因が畿内統治の不全にあったという歴史認識を示す。ここで問題となるのは（２）の「室町幕府の奉公衆・奉行人」という箇所である。これは室町幕府の官僚組織を指す。（３）は、信長が義昭の亡命に同行した二十名ほどの「奉公衆・奉行人」を除いて大多数が織田政権に残る。これを統率していた人物が光秀であった。「山崎の戦い」における明智軍は「奉公衆」「奉行衆」「畿内国人」、守護大名京極・若狭武田氏など室町幕府の補完勢力で構成されていた。

「奉公衆」は江戸時代の旗本と同様将軍のお目見えがかなう直臣。親衛隊・側近・使者等行政官僚。

「奉行衆」は司法官僚。鎌倉時代から連続する十家ほどが世襲。「政所執事」（伊勢氏）が統率。

POINT：明智光秀は室町幕府の官僚層（奉公衆・奉行衆）を統轄。

（４）は織田政権とは「織田・明智体制」のことである。信長の畿内統治は光秀に丸投げした間接統治であったという実態を指摘。しかも天下支配の要衝坂本・亀山両城を信長は光秀に与えた。

信長の天下支配の土台=光秀が統括した室町幕府官僚機構。

毛利家外交僧安国寺恵瓊（あんこくじえけい）は１０年前に織田政権の構造矛盾を指摘

信長の代五年三年は持ちたるべく候、明年あたりは公家などに成らるべきかと見及び候、

左候て(そうなった)後、高ころびあをのけにころばれ候いずると、見え申し候、

天正元年（1573）１２月１０日付小早川隆景・吉川元春重臣２名宛書状『吉川家文書』６１０号

これは予言ではなく具体的な説明が要求される報告！

三鬼氏と恵瓊の視点一致＝室町幕府官僚機構を温存

織田政権＝織田・明智体制＝畿内(天下)支配構造

「織田・徳川体制構築」⇒「体制・制度防衛のための蜂起」

○光秀は細川藤孝・三淵藤英・上野秀政と並ぶ将軍側近。

○将軍側近は代々足利家に仕える「奉公衆」が絶対要件！

○光秀は今の審議官・局長級！例外なくキャリア=「奉公衆」。

○系図に進士から明智へ改姓とある。進士家は将軍側近！